ガーデニング雑誌という世界

新妻　昭夫(人間環境学科)

ヴィクトリア駅から歩いて10分ほどのところに、あの王立園芸協会(Royal Horticultural Society:以下ではRHSと略記する）の本部がある。その一角を占めるリンドリー図書館（Lindley Library）は市民に無料で開放されていて、会員・非会員を問わず誰でも自由に利用することができ、また国籍も問われない[1]。地階の閲覧室に入れば、ガーデニングや園芸の関連図書が開架式の棚に並んでいる。周囲の壁面の天井まで届く書棚には1787年から今日まで続く「カーティス・ボタニカル・マガジン((02)*Curtis's Botanical Magazine*)[2]」が創刊号から並べられ、美しい植物画を手にとって堪能するという贅沢を味わうことができる。また「ガーデニング雑誌の世界」の基礎資料とされる「ガーデナーズ・クロニクル((25)*Gardeners' Chronicle*)」誌も、全巻(1841-1969)が書棚にずっしりと位置を占めている。

雑誌という文化

雑誌は媒体(メディア)である。時代の言説[3]は媒体を通じて形成される。19世紀という時代には活字媒体しか存在しなかった（電波媒体[4]の出現には、20世紀を待たねばならない)。なかでも雑誌は、単行本類にくらべ発行部数が桁違いに多く、購読層も幅広い。この時代のガーデニング(園芸)をめぐる言説の形成に雑誌のはたした役割には、きわめて大きなものがあったであろう。

「園芸の歴史を研究してみようとする誰もが、すぐにガーデニング雑誌の世界を発見することになる」[5]——これはリンドリー図書館長エリオット

氏の言葉であり、私も例外ではなかった。私の主要な関心が19世紀英国で次々に刊行された園芸雑誌にあることは、園芸文化研究所が設立された初年度の研究助成の報告にも書いた[6]。

私の雑誌への興味には、具体的な理由もあった。以前の研究テーマ「英国の博物学者アルフレッド・R・ウォーレスの業績」と「博物学（Natural History）の近代化と進化論の成立」の調査の過程で、雑誌がはたした重要な役割を見出した[7]。この研究の副産物として、この時代には博物学関係にかぎらず多数の雑誌が刊行されていて、いわば雑誌文化と呼べそうな状況があったこと、また園芸関連の雑誌が何種類も創刊されていたことに気づくこととなった。たとえば、私がもっとも集中的に調べた雑誌のひとつ*Annals and Magazine of Natural History*は1841年の創刊だが、その前身となる2誌のうちのひとつは、19世紀前半に活躍した鬼才庭師ラウドン（John Claudius Loudon: 1783-1843）[8]が1828年に創刊した（12）*Magazine of Natural History*であり、このときはじめてラウドンの名前を知ることとなった[9]。

私の当時の関心は近代科学の成立と博物学の近代化にあったが、研究の過程で科学的な知識が大衆化していくことのもつ意義[10]に気づくこととなった。博物学の大衆化の過程は、博物学の知識が広く普及していくことにとどまるものではなかった。大衆化の過程と近代化の過程とが表裏一体の関係にあることがあきらかとなった。一般大衆から理論的な主導者（ウォーレスはその一人）が出現するだけではなく、その理論を世間が受け取り、かつ受容する素地が形成されるという、いわば社会の底上げ効果こそ重要だと気づくことができた。

博物学が近代化された前後の時代に、園芸文化についても同じような状況があっただろうという目論見にもとづいて、2006年度前半の研修休暇の調査計画を立てた。しかし調査対象となる雑誌の種類数は予想していたよりはるかに多く、冊数となれば気が遠くなるとしかいいようがなかった。19世紀の園芸やガーデニングの世界で、たとえば1883年に何があったかを調べようと思ったなら、「見なければならないものとして“ガーデナーズ・クロニクル”誌が1576ページのほか、“ザ・ガーデン（（54）*The Garden*）”

誌1154ページ、“ジャーナル・オブ・ホーティカルチャー((48)*Journal of Horticulture*)”誌*1132*ページ、“ガーデニング・ワールド((*58*)*Gardening World*)”誌828ページ、そして“ガーデナーズ・マガジン((09)*Gardeners' Magazine*)”誌806ページ」[11]が目の前にある——まさに「宝の山」である[12]。

この山は険しくはないが、しかし、とてつもなく巨大である。リンドリー図書館の閲覧室という山麓あたりをハイキングするのは楽しいが、登ってみようとすれば、いつまでたっても頂上が見えないということになるだろう。暗い書庫の奥深くに踏み込めば、かならずや道に迷ってしまうだろう。幸いなことに、道標が三本だけある——英国の19世紀あるいはヴィクトリア朝時代の園芸ないしガーデニングの雑誌(定期刊行物)に関する三人の先行研究であり、発表年順に列挙すれば、Desmond(1977)[13]、Elliott(1993)[14]、そしてWilkinson(2006)[15]である。

出版されたばかりのWilkinson(2006)は、二人の先行研究を踏まえたうで、みずからの「ヴィクトリア朝時代のガーデニング雑誌類」に関する調査結果の詳細な一覧を、「これからの著者たちの役に立つことを願って」、4ページにわたる巻末付録として提供している。これらの雑誌類は「この分野のどのような調査・研究にとっても鍵となる……ぎっしりと印刷されたページには、さらに数多くの発見されるべきものがあり、たくさんの著書や調査プロジェクトの基礎となるだろう」[16]。私もまた、「これからの著者」になりたいと願っている一人である。

これらの道標をたよりに、研修期間を利用して短期間ではあるがこの巨大な宝の山の探検を試みてみた。いまだ裾野で足慣らしをしている段階ではあるが、今回の調査結果の一部を、プロジェクト研究「19世紀英国における園芸文化の大衆化の研究」の今年度の報告とすることにした(192〜235ページ)。

ガーデニング雑誌の進化と二度の大量絶滅

ここでは三本の道標、すなわち三人の先行研究について簡単に紹介しておこう。19世紀という時代の英国における園芸(ガーデニング)の世界の変

化の流れのようすが見えてくるはずだ。

最初にElliott（1993）を紹介する。リンドリー図書館長としてRHSの会員誌「*The Garden*」[17]に書いた3ページという短い記事であり、要点が限定され論旨が明確なので理解しやすい。要点は以下の3点である。①手彩色図版を特徴とする豪華雑誌はカーティス（William Curtis: 1746-1799）が1787年に創刊した（02）*Botanical Magazine*を雛形とし、1830年代に予期しなかったような最盛期を迎えたが、世紀半ばをまたずして「大量絶滅」[18]した。②19世紀の半ば前後（つまり豪華雑誌の終焉の前後）から、情報中心の週刊園芸雑誌が創刊され、四大週間園芸誌[19]の時代が到来する。世紀の最後の四半世紀になって、現代に通じる意味でのアマチュア向け週刊園芸誌が創刊され、第一次世界大戦を境に二度目の「大量絶滅」が起こり、四大週間園芸誌のうち二誌が廃刊されるが、アマチュア向けは生き残った。そして③世紀末を迎えた1897年創刊の（62）*Country Life*を先行例として、今日につづくグラビア誌[20]の時代がはじまる。

①の豪華雑誌をElliottは「彩色図版雑誌（color-plate magazine）」と呼ぶ。文章情報は図版の解説文のみ。手彩色図版（銅板ないし石版で輪郭などを印刷し、それに一枚ずつ手で彩色していく）の作成には手間と費用がかさみ、値段が高価だったことが時代の変化についていけなかった理由だという。時代の変化としては、次のような点が指摘される。最盛期を迎えた1830年代末には「ウォード氏の箱（Wardian Box）」[21]が考案されて大量の異国産植物が輸入され、図版に描いてもすぐ消えていく植物が多くなった。もとより珍奇な異国産の植物は温室栽培しなければならず、ごく一部の富裕階級しか興味をもつことができなかったので、雑誌のマーケットがごく狭かった。主要な読者層だった主任庭師（head gardener）[22]たちの関心は、むしろ花壇（ベッド）用の矮性種や花の大きな改良種に集中していき、マーケットの好みが変化した。

②の第二の「大量絶滅」も、雑誌マーケットの変化によって説明される。情報中心の四大週間園芸誌の購読層の中心は「職業庭師（professional gardener）」だったが、彼らの主要な雇用主だった「カントリー・ハウス

(country house)」(富裕階級の田園地帯の邸宅)が、第一次大戦前から加速度的に法人所有となっていった(病院や学校になった例が多い)。反面、19世紀の最後の四半世紀に創刊された「郊外ガーデナー(suburban gardener)」[23]向けの週刊園芸誌[24]は生き残った。

ガーデニング雑誌文化をになった多才かつ多様な立役者たち

次に、Wilkinson(2006)とDesmond(1977)がリストしている雑誌を比較してみると、どちらも「ヴィクトリア朝のガーデニング雑誌類」をうたっているにもかかわらず[25]、すぐに目につく大きな違いがある。それは扱われている雑誌の時代のずれである。Desmond(1977)がヴィクトリア朝以前の雑誌もリストしているのに対して、Wilkinson(2006)はそれらの雑誌をリストにのせず、逆にヴィクトリア朝以降の雑誌もリストにあげている。Desmond(1977)はリストの一覧表を作成せず、論文の本文そのもので雑誌を羅列的に扱っており、論旨の必要性から、雑誌(定期刊行物)の歴史をヴィクトリア朝以前からの流れとして把握しようとしているといえる。Wilkinson(2006)がヴィクトリア朝以降の雑誌をリストに含めているのは、園芸の歴史を今日にまでつなげようという彼女の研究の主旨[26]のためであり、対照的にDesmond(1977)は、ヴィクトリア朝そのものを研究の主眼としている。

この二人の研究のもうひとつの相違点は、「ガーデニング(gardening)」という言葉のもつ意味の時代による変化に関係があるかもしれない。Desmond(1977)の論文タイトルもWilkinson(2006)のリストの表題も上記のように「ヴィクトリア朝のガーデニング雑誌類」であり、両者ともに「ガーデニング」という言葉を使っている。しかし、Desmond(1977)はこの言葉を広く解釈しているようで、園芸(Horticulture)や植物学(Botany)の雑誌も扱っている。それに対してWilkinson(2006)は言葉をやや狭く解釈し、たとえばロンドン園芸協会(途中から王立園芸協会)の紀要や議事録をリストしていないだけでなく、とくにElliottが「彩色図版雑誌」と呼んだ新種や珍種の図版を中心とする豪華雑誌も除外している。また19世紀の前半には目立った種苗業者のカタログ的な定期刊行物も除外されている。おそらくWilkinson

(2006)はこの言葉を、今日の一般市民の趣味としての「ガーデニング」に近い意味で使っている。

Wilkinson (2006) はその一方で、「フローリスト」[27]と呼ばれていた人々が編集した、あるいは、そのような人々を購買層に想定した雑誌をかなり丹念に拾い上げている (数年で廃刊されたものが少なくない)。逆に、この種の雑誌が、先行する二つの研究では軽視ないし無視されていたことにこそ注目すべきなのかもしれない。Wilkinson (2006)の「フローリスト」重視は、彼女の研究の主眼である「アマチュア・ガーデナー」への注目と強く相関している。職業庭師でも職業植物学者でもなく、また種苗業者でもなく、さらには職業庭師を雇用できる富裕な有閑階級でもなく、ただの一般庶民でしかない「アマチュア・ガーデナー」を重視するとき、産業革命も落ち着いて趣味にいそしむほどには経済的な余裕のできた職人階級などの「フローリスト」も、彼女の視野に入ってきたのであろう。

さらには、Wilkinson (2006)のリストにはあって、Desmond (1977)は扱っていない (あるいは軽くしか扱っていない) 雑誌の特徴として、編集者の肩書きを「園芸 (ガーデニング) ジャーナリスト」と呼ぶことのできるものが目立つことも指摘できるだろう。園芸 (ガーデニング) という分野とジャーナリズムとの関係は今後の課題としたいが、次の二点だけは指摘することができる。第一点は、少なくとも初期の「園芸(ガーデニング)ジャーナリスト」として目だった存在だったグレニー(George Glenny: 1793-1874) は「フローリスト」であり、いわば「アマチュア上がり」が当時の園芸(ガーデニング)界の言説の形成に、みずから創刊し編集する雑誌を通じて重要な役割を果たした可能性があるということである。

第二点は、ジェームズ・シャーリー・ヒバード (James Shirley Hibberd: 1825-90) という「園芸 (ガーデニング) ジャーナリスト」の存在である[28]——Wilkinson (2006) はその評伝を予告している[29]。私の現時点でのヒバードへの関心は、19世紀から今日にいたる英国ガーデニングの歴史を次のように概観[30]したとき、その空白期間を埋めるだろうという点にある。

ガーデニング雑誌研究の展望

園芸雑誌文化はラウドン（John Claudius Loudon: 1783-1843）からはじまる、と私は考える。後発のパクストン（Sir Joseph Paxton: 1803-65）が試行錯誤のすえに、リンドリー（John Lindley: 1799-1865）と共同して「ガーデナーズ・クロニクル」誌（（25）*Gardeners' Chronicle*）を創刊し、半世紀以上にわたって英国の園芸雑誌文化の中心となった。しかし「クロニクル」誌の読者対象は職業庭師や農業経営者と思われ、また広告欄から明らかなように、種苗業者、肥料・農薬製造業者、造園業、造園機械類、芝刈り機や小規模プレハブ温室など園芸用機器類製造業など、関連業界によって支えられていた。この流れに対して、ロビンソン（William Robinson: 1838-1935）が1871年の「ザ・ガーデン」（（54）*The Garden*）の創刊によって反旗を翻し、さらにはジークル（Gertrude Jekyll: 1843-1932）[31]を登用して、「ロビンソン=ジークル様式」と呼ぶべき今日にいたる英国式ガーデニングを確立した。

しかし、パクストンとリンドリーはともに1865年に他界し、おそらくその数年前から実質的に引退していただろう。したがってこの二人が退場した後、ロビンソンが1870年に『ワイルド・ガーデン』[32]で脚光を浴び、その翌年に「ザ・ガーデン」を刊行するまでの1860年代が空白期間となっていた。ヒバードの著作活動と雑誌の発行は、この空白の10年間を埋めてくれる可能性がある。またロビンソンやジークルの顧客が、大規模土地所有階級ではないにしても土地所有者（いわゆる「アッパー・ミドル（中流上層階級）」だったのに対して、ヒバートの読者層は郊外ないし都市に居住する、今日的な意味での「中産階級」だったと考えられる。

以上、英国19世紀の園芸雑誌の世界を概観してみた。今日の市民社会の暮らしの原型は産業革命が完成した19世紀のヴィクトリア時代にできあがったと考えていいだろう。また今日の私たちの庭を楽しんだり鉢植えや切花で身のまわりを飾ったりする習慣も、やはり同じ時代、とくに後半のヒバードやロビンソン（とジークル）の時代にはじまったと考えることができる。

私たちはなぜ花を愛で、土いじりを楽しむのか？　それを考えるための

ヒントを、これらの雑誌群は提供してくれるだろう。また今日の我が国のガーデニングや家庭園芸の状況を考えるとき、いま国内で刊行されているさまざまな雑誌類の調査と研究が多大なヒントをあたえてくれるこのかもしれない。

注(一部の文献の書誌データは別稿(p. 214)の参考文献リストを参照)

1 数年前の冬のある日、目の前の席で古い園芸書を開いていたのは初老のホームレスであった。ずいぶんインテリのホームレスだなと関心していたが、彼が熱心に取り組んでいたのは、拾った新聞の切れ端のクロスワード・パズルであった。

2 雑誌名の頭に付した番号は、プロジェクト研究報告(『園芸文化』本号の217ページ)の付表Aにリストした65種類の雑誌の整理番号である(以下、同様)。

3 「言説」と対になる「表象」については、本号所収のプロジェクト研究報告(192ページ)の注3を参照されたい。

4 電波媒体の登場はラジオ放送の開始まで待たねばならない。世界初のラジオ放送は1920年、米国のピッツバーグのKDKA放送局。ちなみに日本のJOAKの初放送は1925年3月22日である(テレビ放送は1953年から)。また映画の出現は19世紀末であり、20世紀にはいって本格化する(トーキー技術は1920年代末、カラー映画は1930年代半ば)。

5 Elliott, B., 1993. Gardening Times. *The Garden*(*J. of RHS*) vol.9: 427-29.

6 新妻昭夫(2004年)「19世紀前半における植物学の近代化と女性の囲い込み:ラウドン夫妻を事例として」(『園芸文化』、第1号:80-85ページ)参照されたい。

7 拙著『種の起原をもとめて——ウォーレスの「マレー諸島」探検』(1998年、朝日新聞社)の第2章「勤労青年が博物学者になれた時代」を参照されたい。

8 上記注6の新妻(2004年)を参照。

9 「Loudon」は「London」のタイプミスではと思い、人名辞典(「OBD」)を調べて庭園史で欠くことのできない位置をしめる庭師であることを知った。

10 庶民のあいだに、科学に関する情報だけでなく、科学的な考え方が広まること

の意義である。この問題について最近、別の角度から簡単な調査と考察を試みてみた（新妻昭夫（2006年）「たぐい稀な科学書作家」。『月報』（奥本大三郎訳『ファーブル昆虫記』第二巻・下）、集英社）。『昆虫記』で有名なファーブルは、当時の売れっ子の科学ライターであり、『昆虫記』全10巻以外に60冊以上の科学啓蒙書を書いていた（昆虫学や博物学だけではなく、物理、化学、地学、天文学、科学技術史、農学、家政学など）。ファーブルは教師の職を追放されてからは、文筆業で生計を立てていた。つまり彼の書いた啓蒙書がそれだけ売れていたということだ。ファーブルは1823年に生まれ（1915年没）、いまの私の課題である「英国の園芸雑誌文化」と同時代を生きた。科学的な知識の一般への普及という点に注目するならば、英国とフランスというちがいも、また雑誌と啓蒙書というちがいも、ほとんど無視していいだろう。

11　上記注5のElliott（1993）. よくぞ数えたと呆れるかもしれない（ただし各巻が通しページになっているのであれば、各年度の最終号の最後のページを見るだけですむ）が、あの物理的にも重厚な『RHS200年史』（Elliot, B., 2004. *The Royal Horticultural Society: A History 1804-2004.* Phillimore & Co. :Chichester.）を単独で書き上げた著者ならではといえよう。Brent Elliott氏はリンドリー図書館長であり、RHS公文書記録担当官も兼任している。RHSは、その名声や本部建物の格調から想像するほど裕福な団体ではないらしく、閲覧室の相談テーブルに他のボランティア職員二人と交代で座り、頻繁に鳴る問い合わせの電話に答えている。もちろん私がなにかを捜していたり、コピー機の調子が悪かったりしたときには、すぐに声をかけてくれる。

12　由緒あるこの図書館も2001年の新館オープンにともなって近代化され、設置された数台のパソコンに独自の検索システムが入っていて、書名や著者名だけでなくキー・ワードでも即座に図書の所在がわかる。たとえば、新刊のWilkinson, A., 2006. *The Victorian Gardener: The Growth of Gardening & the Floral World.* Sutton Publishing（Stroud, Gloucestershire）を捜してみると、「ウィズリー・ガーデン（Wisley Garden）」の図書室に一冊だけあり、リンドリー図書館にはまだ入っていなかった。ただし、雑誌など定期刊行物については、まだ「工事中」で検索することができない。Wilkinsonは旧館時代の閲覧室のガラス戸キャビネットに

収蔵された雑誌類の利用しやすさを懐かしむあまりか、奥の収蔵庫から一冊ずつ出してもらうのでは「ランダムな好奇心を制限し、詳細な調査を妨げるかもしれない」と不平のようなことを巻末注に紛れ込ませている（第一章の注3）。忍耐心という言葉さえ知らない能天気な性格の私としては、検索システムの完成をただ待つのみ。

13 Desmond, R., 1977. Victorian Gardening Magazines. *Garden History* 5（3）: 47-66.

14 注5参照。

15 注12参照。

16 注12のWilkinson（2006）, xv.

17 この雑誌名（*The Garden*）は、後述するウィリアム・ロビンソン（William Robinson: 1838-1935）が1871年に創刊した週刊園芸誌（54）*The Garden*と同一である（1927年に廃刊）。*Journal of RHS*が1975年から*The Garden*と誌名変更され、編集方針も専門誌から会員へのサービス、とりわけ新規会員の勧誘の重視へと変わった。この誌名が選ばれたのは「ロビンソンへの敬意」から。この誌名以外に考えられず、その理由は、*Journal of RHS*が100巻を数えた（つまり一世紀が経過した）1975年が、奇しくも有名なパートナーシップの一世紀目と一致したからだという。「有名なパートナーシップの一世紀目」とは、ガートルード・ジークル（Gertrude Jekyll: 1843-1932）がロビンソンをはじめて訪ねた日から100年目ということであり、ややこじつけのような印象はいなめないだろう。Elliott（2004）の191ページ参照。

18 「大量絶滅（mass extinction）」という言葉は、もちろんただのたとえであり、それ以上の意味は含意されていない。地球上の生物の進化では、数度の大量絶滅後に空いたニッチ（生態学的地位）に適応放散が起こって新たな時代が形成されたが、園芸雑誌の歴史では、次の時代を担う種類の雑誌は大量絶滅以前から刊行されはじめている。むしろ、新たな雑誌が旧世代の雑誌の絶滅を加速したと考えられる。

19 四大週刊園芸誌とは、以下の四誌。（25）*Gardeners' Chronicle* (*and Agricultural Gazette*); (*33*) *Cottage Gardener*→ (*48*) *Journal of Horticulture;* (*51*) *Gardener's Magazine;* (*54*) *The Garden.*

20　原文では「glossy magazine」。英和辞典によれば英国英語で、光沢紙に印刷された雑誌のこと。ただし、写真が満載され見た目は豪華だが内容は平凡という揶揄の意味合いもある。今日の日本語の「グラビア誌」にあたるだろう。米国英語では「slick」という。

21　「ウォード氏の箱」の考案の最初の印刷発表は、次の文献である。Ward, N. B., 1842. *On the Growth of Plants in Closely Glazed Cases.* John van Voorst.

22　主任庭師というより、時代的には「庭師頭」あるいは「庭師の頭領」と呼ぶほうがイメージしやすいかもしれない。いずれにせよ富裕階級に雇用された庭師であり、多数の弟子を配下にしていた。主任庭師本人が雑誌を購入することもあっただろうが、雇用主が購入して庭師に読ませた場合が多かったものと思われる。

23　ここで「郊外ガーデナー」と呼ばれているのは、それ以前の時代の新興ブルジョアジーではなく、むしろ中流上層階級（upper-middle）と呼ばれる人々である。郊外や田園地帯に家をもつだけの余裕はあったが、庭師を雇用するほどの財力はなく、必要に応じて職業庭師に作業を依頼するほかは、庭の設計も植物の栽培も自分で行っていたと考えられる。

24　（54）*Gardening Illustrated*;（58）*Amateur Gardening*.

25　Desmond（1977）の論文タイトルも、またWilkinson（2006）の雑誌リストの表題も、ともに「ヴィクトリア朝のガーデニング雑誌類（Victorian Gardening Magazines）」である。

26　彼女はWilkinson（2006）の冒頭で、自分の研究はこれまでの主流であった「庭園（ガーデン）の歴史」ではなく「ガーデニングの歴史」であると明言し、その末尾で「いまから150年前にガーデニングを、私たちが21世紀にガーデニングを楽しんでいるのと同じ理由で楽しんで」いた普通の人々の存在を強調している。

27　「フローリスト（florist）」という呼称は、今日では街角の花屋さん、あるいはフラワー・アレンジメントなどを専門とする人々を指すのが一般的である。しかし花屋もフラワー・アレンジメントも、19世紀の半ばまでは存在しなかったといっていい（新妻、2004; Davies, 2000）。それ以前の時代には、「フローリスト」は「フローリスト・フラワー」を栽培・品種改良し、品評会で競い合う愛好家

たちを指していた。Duthie（1988）は、英国の17世紀から19世紀にかけてのフローリストについての唯一の研究といっていいだろう（この本は彼女の二編の論文、Duthie（1982）とDuthie（1984）をもとにして書かれている）。またScott-James（1981）は第6章「Growing for Show」でフローリストをバランスよく扱っている。英国のフローリストの中心は、もともとはフランドル地方から逃れてきた毛織物職人だったようで、19世紀のフローリストの多くも北部工業地帯の毛織物などの職人たちであった。愛好家団体や品評会などの運営が次第に組織化され、評価の基準も明確化されていった。18世紀末までには、次の8種が「フローリスト・フラワー」と呼ばれるようになった——アネモネ(*Anemone*)、アウリキュラ(*Primula auricula*)、カーネーション(*Dianths caryophillus*)、ヒアシンス(*Hyacinthus orientalis*)、ナデシコ(*Dianths plumarius*)、ポリアンサス(*Primula polyantha*)、ラナンキュラス(*Ranunculus*)、そしてチューリップ(*Tulipa*)。「フローリスト」とはどういう人たちかについては、歴史上の有名な逸話である17世紀前半のオランダの「チューリップ熱」を思い起こせば想像できるだろう（関連する文献は少なくないが、近年のものとしてはパヴォード『チューリップ』、また読んでわくわくする小説としてデボラ・モガー『チューリップ熱』がある）。ようは花好きな人々なのだが、栽培や品種改良だけでなく、品評会での競争に熱中するあまり、一部の人は熱狂的なマニアとなることがある。我が国でも、最近のラン愛好家の一部だけでなく、いまも盛んな菊作りの愛好家や江戸時代の朝顔愛好家に同じ傾向を指摘できるだろう。なお、フローリストは「庭園史」ではこれまでほとんど無視されてきた。分野が異なるのだから当然ではあろう。しかし「園芸文化史」を考えるなら、無視することはできない。同じことは、日本の菊作りや朝顔愛好家についてもいえる。

28 ヒバードを「園芸ジャーナリスト」と限定するのは不適切であり、むしろ「博物学ジャーナリスト」と呼ぶべきかもしれない。ハーバード大学の進化生物学者であった故スティーヴン・S・グールドはエッセイ集の一冊『ダヴィンチの二枚貝』（渡辺政隆訳、2002年、早川書房）所収の「面と向かって明瞭に見る」（上巻、第3章）で、彼の著書『素朴な装飾』（Hibberd, J. S., 1858. *Rustic Adornments*. 2nd ed. London: Groombridge and Sons.）を主な題材として、水槽という装置の考案と

魚の室内飼育、それによってもたらされた自然観の変化の意味を論じている。グールドによれば、ヒバードは身近な自然を育むことが趣味のよい品格のある家庭を育むという信念をもち、ヴィクトリア朝時代の最大の前進は、都会で上品な生活を送る家庭が室内で自然を育むことを可能にした装置の発明であると指摘し、その具体例として「水槽」のほか「シダの鉢」「鳥かご」「植物の寄せ植え」を取り上げているという。

29　彼女はヒバードの評伝を、すでに長文の論文として発表している（Wilkinson, 1998）。

30　2003年度と2004年度の園芸文化研究所プロジェクト研究報告を参照されたい（新妻、2004年、2005年）。

31　ジークルについては、新妻（2005年；2006年）および土屋昌子（2006年）を参照されたい。

32　Robinson, W., 1870. *The Wild Garden: or our groves and shrubberies made beautiful by the naturalization of hardy exotic plants. With a chapter on the garden of British Wild Flowers. John Murray.*